

授業の作法

教室に入って驚いた事がありました。

黒板に子どもの顔写真付きの大きなネームカードが、ずらりと並び、黒板の1/3を占領しているのです。

先生は、窮屈そうに板書事項をあいている2/3に書いています。

異様な光景です。

一人ひとりの写真が付いたネームプレート。一人ひとりを大事にするとか何とか、「意味」があるのかもしれない。しかし、なにも常に黒板に貼っておくことはありません。はずしておけばいいのです。なんだか、他教師への担任からのある種のアピールのようで気色が悪かったです。

古い掲示物が貼りっぱなしの教室もあります。プリントや画用紙が色あせていたり、はがれていたりします。また子どもが作った掲示物の中に誤字があったりするのにも私には気になることです。指導とは、あらゆる場面で行われるものだからです。

ところで、掲示物ですが、非常に派手なものを見ることがあります。金や銀のテープを使って飾り付けたり、様々な色を使って文字を書いたり。

私は、その担任に訊いてみます。

なぜ、こうした配色になっているのですか、と。

なにか意味はあるのですか、と。

すると返ってくる答えはたいてい決まっています。

「教室が明るくなる」

「楽しい雰囲気になる」

たしかにそうかもしれませんが、教室は学習するところです。

黒板の脇に色とりどりの掲示物があることが、ある子どもたちにとっては、とても気の散るものになることを、私は心配します。

教室の掲示物は、そもそも次のような役割を担っています。

- ・連絡機能（各種通信）
- ・相互学習機能（絵や作品）

・ 備忘機能（当番・係表）

このような機能を果たせば、十分なのです。
だから、シンプルで見やすいものがよいのです。
それは、たった一つのことを守るだけで十分です。

使用する色を二色だけにすること

例えば、緑と黄と決めたら、あらゆる掲示物をこの二色でつくるのです。
これだけで、掲示物は落ち着いてきます。

ある公開授業でこんな場面を見たことがあります。
始業前、教師が子ども全員を立たせ、「見に来てくれた先生方に挨拶しましょう」と促します。
子どもたちは教師の合図に合わせて「よろしくお願いします」と挨拶します。
授業終了後は、「ありがとうございました」といわせる念の入れようです。
私は、正直子どもたちと目を合わせることができませんでした。
あまりにも愚劣な教師と同様に見られることが恥ずかしかったのです。
子どもは、教師の道具ではありません。
授業では、子どもたちの担任教師への冷たい視線が気にかかりました。

ひどく雑然とした教室も、たまに見かけます。教師用机の上にプリントが散らかっていたり、花瓶に入っ
た花が枯れていたり、鍵盤ハーモニカが棚から滑り落ちていたり.....。

とりわけ気になるのが、床の上のゴミです。
給食後の授業だったりすると、ストローの袋が落ちていたりする。
せめて授業公開の日くらい拾えばいいのにと感じてしまいます。
授業公開の日でさえそうなのだから、普段は推して知るべしです。
そういう教師の授業がうまいことはまずありません。
しかし、実は、えらそうなことは言えないのです。
私には、こんなことがありました。
さあ明日は研究授業だという日。
私のもっとも尊敬するある校長先生が、私の教室をモップ掛けしていたことがありました。
私は、そのことを知ってたいへん恐縮すると同時に体中の血液が顔に集まってくるのを感じました。

私は、それから教室をきれいにすることをどのようにシステマティックやるかということを考えました。
子どもたちに、一人一役の仕事を当てました。
そして、学級文庫の整頓、乾いたぞうきんの片づけなどをその仕事に組み入れました。
また、ロッカーや机の中の整頓日を決めました。
最後のしめは、私自身がとにかく教室中のゴミを拾うようにしたことです。
そうすると、子どもたちも真似するようになっていき、少しずつ子どももゴミを拾うようになりました。

さて、最後に授業の作法の中で最も重要なことは、やはり誠実な態度で授業をし、授業後もその態度を貫くことです。

こういう教師がいます。

「多くの人に来て子どもたちは緊張していたようで」

「いつもはこうじゃないのですが……」

「前に教えていたことなのですか……」

すべて担任の責任なのです。

授業を公開するということは、その授業で起きたすべてのことは、自分の責任であるという覚悟をすることになりません。

そして、そうした覚悟がすんなりとできるのは、普段から自分を鍛え、子どもを鍛え、子どもができないのは自分の教え方が悪いからだと考えられる教師だけなのだと思います。

支援を必要とする子を見つけるシステム

私は前号で次のような事柄のシステム作りが、現場には、早急に必要ですと書きました。

すなわちそれは次の3つです。

障害がある子どもをピックアップするシステム。

その子を科学的に見取る（あるいは見取るための）システム。

その子を全校体制で指導するシステム。

特に について書きます。

現場で、やるべき事は次の二つだと私は思います。

あ) 年度初めの基礎学力調査

い) 担任教師によるスクリーニングテスト

あ)は、そんなに難しくなくていいのです。

漢字50問テスト、四則計算20題くらいを、全学年までの内容で出題し実施すればいいのです。

このテストで、2割以下の児童はピックアップの対象でしょう。

また、それに加えスクリーニングテストです。

このテストは、対象児童に近い存在である保護者や教師が行うテストです。

簡単な質問に答えていくテストです。

例えば、「しばしば忘れ物をする」とか「授業中、座っていることが苦手だ」「自分の興味のある話を、一方的に話すことがある」などのような質問です。

これら二つに年度初め取り組むことが、まずは必要です。

また、保護者への説明も折を見て必要でしょう。

私は以前「とにかく保護者には良いところだけを伝えよう」と思っていました。

もちろんそれはとても重要なことなのですが、いまは「事実を伝えることがさらに重要だ」と考えるようになりました。

ですから、例えばこんな風に話をしています。

「実は、給食の時間などに、恐竜の話をずーっとしているのです。それは、 ちゃんの興味のあることなのでとてもいいことなのですが、その間は他の子が話ができなかったり、途中で他の子が遮ったりすると、机をばんばんたたいて激しく怒るのです。おうちでもこのようなことはありますか？」

保護者がそのことについて困っている様子なら、「それはお困りでしょう。私も、 ちゃんのそうしたところ気になっていたのです。一緒にこれからどうしたらいいか考えていきましょうね。」と話すようにします。

前述のあ)い)を行ったとしても、実際には、すぐに保護者に「では専門機関に相談を」とはならないのです。そうですよね、先生方！

そのとき、すぐにアプローチできるかどうかは、学校での様子をどれだけ保護者に普段から伝えているかなのです。